
利口な女狐の話

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

利口な女狐の話

【Nコード】

N6483N

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

頭の回転の速い女狐ビストロウシカ。彼女の森の中でのしたたかだがしつかりとした生き方は。ヤナーチェクのオペラを小説にした作品です。主人公は狐です。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

第一幕その一

利口な女狐の話

第一幕 森でのほじまり

のどかな森の中。木々が上を覆い下には小さな草花がある。日差しも木々によつて柔らかいものになっている。

穴の中から穴熊が顔を出してのどかにパイプをふかしている。その彼に蝶やトンボ達が声をかけてきた。

「ねえ穴熊さん」

「今のお家はどうなの？」

「ああ、いいねえ」

穴熊はのどかな顔で彼等に言葉を返す。

「この家はわしが丹念に掘ったものだからね」

「だからいいんだ」

「そんなに」

「うん、いいよ」

機嫌のいい顔で彼等に応える穴熊だった。パイプはそのままだ。

そこから青い煙がくゆらいでいる。

それをふかしながらのどかにたたずんでいる。そして蝶やトンボ達がある上を気軽に飛んでいる。その彼等のところになった。

「あれっ、人間が来たぞ」

「猟場の管理人さんじゃないか」

「じゃあ安心だね」

「あの人は怠け者だからな」

蝶やトンボ達と共にのどかに言う穴熊だった。濃い黒い髭を顔中に生やしたがつしりとした身体つきの男がのそのそと来てそのうえで言うのだった。

「ふう、疲れたな」

「疲れたってここに来ただけなの？」

「それだけじゃない」

「ねえ」

蝶やトンボはそう言いながらその管理人を見る。

「たったそれだけなのに」

「本当に怠け者だね」

「早速ビール飲んでるし」

「全くだよ」

そんなことを言いながら切り株の上に腰を下ろしビールを飲む管理人を見ながら話をする。その彼等の下に蛙が来た。蛙は彼等に対して言ってきたのだった。

「おつい、何か面白いことはあるかい？」

「面白いこと？」

「そうだよ。何かあるかい？」

こつ彼等に跳ねながら問うてきたのである。

「何かさ。あるかい？」

「何かって言われても」

「別に」

彼等は飛びながらその蛙に応える。

「ないよ」

「というか食べたなら？」

「私達以外を」

ここで自分達をと言うのは忘れなかった。

「何でもいいから」

「それが一番楽しいんじゃないの？」

「そうだね」

彼等の今の言葉に納得して頷く蛙だった。

「それじゃあ」

「ちよつと待ちなさいよ」

ところがここでその蛙を呼び止める声がしてきた。

「あんたそれはどうなのよ」

「げっ、ビストロウシカ」

そこにいたのは一匹の見事な赤と黄色の毛並みの雌狐だった。それがいたのだ。

「何でここにいるんだよ」

「あんたが」

「何でじゃないでしょ」

蝶やトンボ達に対して返すそのビストロウシカだった。

「私だつてこの森にいるのよ。当たり前でしょ」

「言われてみればそうだけれど」

「けれどそれでも」

「文句あるの？それよりも蛙君」

「何だよ」

蛙は少し忌々しげに彼女を見上げて言葉を返したのだった。

「それで一体」

「あんた美味しそうね」

楽しそうに笑つて言うのだった。

「結構。私蛙は食べないけれど」

「あんた健康の為に菜食主義じゃなかったのか？」

「鶏肉も好きよ」

「じゃあ僕は関係ないじゃないか」

「ところが蛙つて鶏肉に似た味らしいし」

不機嫌な顔になる蛙に対して彼女は楽しそうなものだった。

「だからと思つてね」

「嫌なこと言うね」

「特にこの背中なんか」

その背中をつん、と押すとそれで驚いて跳び上がった蛙はそのまま居眠りをしだしていた管理人の鼻の上に落ちてしまったのだった。

第一幕その二

それを受けた管理人は。

「な、何だ!？」

「おい、おじさんが目を覚ましたよ」

「全く、碌なことにならないな」

蝶やトンボ達が原因を作ったビストロウシカに抗議する。しかし彼女は平気なものである。

「それで？」

「やれやれ、こんな態度だよ」

「ふてぶてしいものだよ」

「些細なことじゃない。こんなこと」

こう言う彼女だった。その間に蛙は管理人の鼻から逃げ出して管理人はビストロウシカが目の前にいるのに気付いたのだった。

「おや、狐かい」

「その狐だけれど」

「ふむ、これは」

彼女をまじまじと見だしたのだった。見てみるとだった。

「中々可愛いな。これはいい」

「いいって？」

狐は管理人の言葉がわかるが管理人は狐の言葉がわからない。人間と動物の違いが出てしまっていた。だがお互いそのことに何とも思っていない。

「私が美人なのは言うまでもないわよね」

「こんなのだからね」

「全く」

「本当だよ」

蝶やトンボだけでなく蛙まで言うのだった。

「けれどさ、そんなに自惚れてると」

「そのうち痛い目に逢うよ」

「そうなくても知らないから」

「そんなことならないわよ」

彼女だけがそう思っていた。しかしであった。

「小僧のお土産に丁度いい」

「えっ!？」

ビストロウシカの襟首を後ろからぐい、と掴んで持ち上げたのだ。それで捕まってしまったのだった。

「どういうこと、これって」

「子供達が喜ぶわい」

「あゝあ、言わんこつちゃない」

「全く」

「そうなると思ったよ」

捕まってしまったビストロウシカを見ながら言う彼等だった。しかし全く同情してはいない。

「まあ捕まっても生きてるからね」

「また会いに行くから」

「またね」

「またねじゃないわよ。何で私がこんな目に遭わないといけないのよ」

捕まってもビストロウシカはビストロウシカだった。彼女はそのまま管理人の家に連れて行かれる。彼女にとっては全く以って納得のいかない話だった。

そのまま彼女は管理人の家に連れて行かれて家の片隅にある小屋に置かれた。縄でつながれいつも無然とした顔をしていた。

「全く。御飯は安心して食べられるけれど」

「それだけがよかった。」

「他は何なのよ。退屈だし自由はないし」

「まあそう言うなって」

ここで犬が来た。大きなシェパードだった。

「御飯がいつも食べられるのはいいことじゃないか」

「あんたはそう思うのね」

「そうさ、思うよ」

その通りだというのだった。

「他に何が問題なんだよ」

「全く犬っていうのはね」

その彼を一瞥してからふう、と溜息をついてみせて言うビストロウシカだった。小屋の前に座ってそのうえで彼と話をしている。

「何で人間に逆らわないのかしら」

「それがわし等犬なんだがね」

彼の返答は何を言っているのだといったものだった。彼等は家の隅のその二つ置かれた小屋のところで話を続けるのであった。

「そんなことを言われてもな」

「そんなのだから人間に舐められるんじゃないの？」

「いや、舐められてはいないぞ」

犬はそれは否定した。

「このラパークにしてもだ」

「あんたラパークって名前だったの」

「そうだ。それがわしの名前だ」

まさにそうだと名乗る彼だった。

第一幕その三

「いい名前だろう?」

「どうせその名前も人間が名付けたものでしょう?」

しかしビストロウシカはそれを聞いてもこう冷たく返すだけだった。

「そうなのでしよう?」

「確かにそうだが」

それは彼も否定しなかった。

「しかしいい名前じゃないか」

「人間のつけた名前よ」

「だから駄目だというのか」

「そうよ。駄目よ」

まさにそうだというのだった。

「それに犬つてきたら私達を虐めるし」

「それはあんた達が悪さをするからだろうが」

「私達はただ大好きな鶏を食べるだけよ」

まさにそれだけだというのだ。

「その何処が悪いのよ」

「悪いよ。いいかい、日本という国の狐はね」

「日本?そんな国があるの」

「ここよりずっと東にあるらしい」

ラパークは子供達が親から聞いて話していたことを彼女に話すのだった。

「その狐は何でも豆から作った食べ物揚げたものが好きらしい」

「変なもの食べるのね、その国の狐は」

「あんたもそうして野菜を食べたらどうだ?この国の狐も」

「野菜は食べてるわよ。これでも菜食主義者なのよ」

森で話したことそのままだった。

「言っておくけれどね」
「しかし鶏も食べるんだろっ?」
「それが悪いの?」
「悪いから怒られるんだよ」
あくまでこう言うラパークだった。
「そうじゃないか」
「違うわよ。あなたにはわからないのね」
「わからないって何がなんだ」
「それがわからないから駄目なのよ」
「何だっというんだよ」
話はここで中断となった。そしてここで。
「あっ、これがなんだ」
「そうなんだよ、これがだよ」
「お父さんが持って来てくれた狐ね」
この家の子供達だった。急にビストロウシカ達の前に来たのだ。
「可愛いね」
「そうだね」
「毛並みなんて」
「こらっ、触らないでよ」
触られて不機嫌になるビストロウシカだった。
「折角整えた毛づくろいが乱れるじゃないの」
「人間の子供はそうなんだよ」
ここで横からラパークが言ってきたのだった。
「そうやってべたべた触るものなんだよ」
「私は触られたくないのよ」
自分のことを主張するビストロウシカだった。言う間にもべたべたと触られ身をよじって逃げようとして慥然とした顔になっている。
「そんなの嫌よ」
「嫌でも飼われてるからには」
「飼われるのだから頼んだ覚えはないわよ」

「それでも飼われてるからには」

「だから嫌だつて言ってるのよ」

話している間にもまだ子供達は触ってくる。それにいい加減頭に
来てだ。

「いい加減に死なさいっ」

「うわっ！」

男の子の手を噛んだ。軽くである。しかしこれで子供達が泣いて
しまった。

「狐が噛んだ！」

「噛まれたよ！」

「やられた！」

「何っ、狐が!?!」

「噛んだだつて!?!」

それを聞いた管理人とその妻が出て来てだ。彼女を殴りつけた。

頭をばかりとやられてさらに不機嫌な顔になる。機嫌はいよいよ最
悪なものになりそのうえで丸くなる。その彼に対して今度は鶏達が
やって来て言うのだった。この家に飼われている鶏達だ。

「何やってんだか」

「全く」

「あんた怒られたいの？」

こつこつ言う彼等だった。

第一幕その四

「ただ殴られただけじゃない」

「子供が相手なんだし」

「気にしなかったらいいのに」

「気にしたらね」

それを聞いて一旦顔をあげるビストロウシカだった。表情はそのままだ。

「どうだっていうのよ」

「どうだもこうだもないでしょ」

「だからそんなことやったらよ」

「何にもならないだろ」

こう言ってきた。しかしビストロウシカはまだ言うのだった。

「あのね、動物は言う時に言わないと駄目でしょ」

「駄目っていうのね」

「それでも」

「そうよ、だから私はね」

「無駄でしょ、でも」

「ねえ」

鶏達は彼女の言葉を聞いても言うことは同じだった。

「人間に逆らってもね」

「飼われているんだし」

「だったら飼われていることが問題なのね」

その言葉に反応した彼女だった。

「よし、わかったわ」

「わかったって？」

「一体何がわかったっていうのよ」

「それで」

「私は森に帰るわ」

そうするといつのである。言つとすぐに立ち上がったのだつた。そして縄を噛む。それで切るつといつのだ。

「えっ、本当に逃げるのかい」

「そうよ」

驚きの声をあげるラパークに対しても応える。

「その通りよ」

「何でそんなことをするんだ？」

「だから飼われるのが嫌なのよ」

それに尽きた。

「わかつたわね。それじゃあね」

「それで森に帰るのかい」

「機会があつたらまた会いましょう」

ラパークに対する言葉だつた。

「それじゃあね」

「またそんなことを言つて」

「ここにいたら食べ物はあるのに」

「食べ放題だよね」

「ねえ」

鶏達もそれぞれ言つ。

「それで何でまた森になんて」

「何でそんなことを」

「飢え死にしても知らないよ」

「だからね。私は飢え死にする程馬鹿じゃないのよ」

「そうだといつのである。」

「わかつたわね。それじゃあね」

「行くの」

「本当に」

「そうよ。あんた達とも付き合ひは短かつたけれど」

鶏達に対しても言つ。

「またね」

「まあこつちは食べられないだけよかったよ」
「狐だからね」
「正直何されるかわからないし」
「あんた達みたいなのは食べないわよ」
「口で縄を切りながら述べる。」
「間違つてもね」
「あれつ、何で？」
「何でなの？」
「狐は鶏を食べるものじゃない」
「今のビストロウシカ of 言葉を聞いて逆にいぶかしむ狐達だった。」
「それで何でよ」
「そんなこと言つて」
「実際に僕達に何もしそうにないし」
「鶏肉は選ぶのよ」
「だからだというのである。」
「それだからよ。わかつたわね」
「つまり僕達がまずいってことか」
「それだからなの」
「私達つてまずいの」
「飼われてる鳥は動かないからまずいのよ」
「だからだというのである。」
「あんた達なんてどう見てもまずいし」
「こんなに美味しそうなのに」
「ねえ」
「それで何もしないなんてね」
「それじゃあね」
彼等をいささか慚然とさせたところで縄が切れたのであった。こ
れでいよいよビストロウシカの念願が適うのであった。
「これでよしよ」
「さよならね」

「それじゃあね」

これでビストロウシカは家を後にした。そうしてそのまま森に向かう。そして向かう先は。

第二幕その一

第二幕 結婚式

森に戻って来たビストロウシカはまず緑の木々を見上げた。それは実に懐かしくそして心地よいものだった。その柔らかい日差しもである。

「これがいいのよね」

「あれ、ビストロウシカじゃないか」

「最近見なかつたけれどどうしたんだい？」

「生きていたんだ」

彼女を見つけた森の動物達が彼女に声をかけてきた。

「元気そうだけれど」

「どうしていたんだい？」

「ちよつとね。人間に捕まってね」

「もう出て来たんだ」

あの蛙がここで言った。彼は木の上にいる。

「早いね」

「逃げ出すのなんて訳ないわよ」

その蛙に対して胸を張って言うビストロウシカだった。

「それはね」

「訳ないっていうの」

「そうよ。それにしてもあんたも相変わらずね」

「そうかな」

「そうよ。暢気に生きてるみたいね」

「僕はね。それが一番いいからね」

そう言われても平気な顔の彼である。

「それはそうとね」

「それはそうと？」

「お家が欲しいわね」

「こんなことを言うのだった。」

「これからね」

「おや、最近見ないと思ったら」

「ここで穴熊が家から出て来た。そうしてそのうえで言うのだった。」

「戻って来たんだ」

「戻って来たわよ。ところであんた」

「何だい？」

「そこ別荘よね」

「ビストロウシカは顔を出してきたその穴熊に対して言った。」

「穴熊さんの」

「それがどうしたんだい？」

「別荘だったらいいわね」

「それを聞いてまずは納得した顔で頷く彼だった。」

「ねえ、それでだけれど」

「それでだけれど？」

「その別荘譲ってくれない？」

「こう言うのだった。」

「よかつたら」

「また随分と図々しいことを言うな」

「穴熊は今のビストロウシカ言葉を聞いてまずは呆れたのだった。」

「ここはわしの別荘だぞ」

「別荘だからよ」

「それを譲ってくれというのかい」

「駄目かしら」

「駄目とかそういう以前とは思わないのか？」

「穴熊はまた怪訝な顔で返した。」

「幾ら何でも」

「御礼はするわよ」

「御礼というのだ。」

「それもね」

「御礼かい」

「はい、これ」

言いながら何処からか出して来たものがあつた。それは見れば一房の葡萄であつた。それを出してきたのである。

「どうぞ」

「葡萄かい」

「あんた好きでしょ」

あらためて彼に問うビストロウシカだつた。

「これは」

「まあ好きだけれどね」

穴熊もそれは否定しない。

「そうでしょ。好きよね」

「そうだがこれだけで済むものか」

穴熊は慚然とした顔で彼女に言い返した。

「葡萄だけで」

「いいじゃない、乙女からの心尽くしよ」

「それだけでこの別荘をか」

「駄目だつていうのね」

「駄目に決まつてるだろ」

ここではつきりと言ひ切つた彼だつた。

第二幕その二

「これ位じゃ」

「じゃあどれがいいのよ」

「だからこれ位じゃ駄目だ」

穴熊はまだ言う。

「葡萄だけじゃな」

「それならどうするかよね」

「ああ。どうするんだい？」

「あんた森の西の方にも別荘持ってたわよね」

このことを言ってきたのであった。

「そうよね。持ってたわよね」

「それが一体どうしたっていうんだ」

「そこに可愛い穴熊の娘がいるわよ」

これは本当のことである。それを彼に告げたのだ。

「穴熊のね」

「ほう、それは本当かい」

「私はこういう時に嘘はつかないわよ」

堂々と言ってみせたのである。

「しかもよ」

「しかも？」

「その娘も葡萄が好きなのよ」

こう話すのだった。

「葡萄がね。これでわかったわね」

「ああ、よくわかったよ」

それを聞いて満足した顔で頷く彼だった。

「それじゃあな」

「さあ、これでいいわね」

「あんたは随分と知恵が回るんだな」

穴熊はそのビストロウシカの顔を見てにやりと笑ってみせた。

「これで別荘を手に入れるなんてな」

「わかつたら早く行きなさい」

その葡萄をあえて出して出してみせてまで言うのだった。

「いいわね、これで」

「わかつたよ。それじゃあな」

穴から出て葡萄を口に啜えてそのまま森の西の方に向かうのだった。それを聞いてすぐに家を後にする。ビストロウシカはそれを見届けてから穴の中に入った。

これで家を手に入れた彼女は家の中でゆっくりと寝た。その頃人の世界では。

酒場であった。酒場は木造であり褐色の内装である。その店の奥で二人の三人の中年の男達が卓を囲んでいた。ビールを飲み煙草をふかしながらトランプを楽しんでいる。

「それだけでけれど」

蚊の様に痩せた男がいた。端整な服を着てカードを手に行している。

「どうかな」

「どうかといえますと」

見れば管理人もいる。彼は木の杯の中のビールを美味そうに飲んでいる。それを飲みながらそのうえで楽しく過ごしているのだった。

「校長先生、何か？」

「いやいや、管理人さんはずね」

その管理人には笑って返した。

「もう関係のないお話です」

「もうですか」

「結婚されてるじゃないですか」

だからだというのである。薄暗い部屋の中で煙草の煙がくゆらいでいる。周りの他の客達もそれぞれ酒に煙草を楽しんでいた。カードでもある。

「ですから」

「ああ、それで関係ないんですね」

「そういうことです。それで牧師さん」

「はい」

見ればその牧師は穴熊そっくりの顔をしている。見れば見る程だ。穴熊がそのまま牧師の黒い服を着ているようにしか見えない。

「御結婚は」

「それはまだですよ」

苦笑いで応える牧師だった。その手にカードを弄びながらだ。

「全然ですよ」

「おや、御相手は」

「いやいや、全然」

校長の言葉にまた苦笑いで返した。

「ないですよ」

「本当ですかね」

「本当ですよ。嘘なんか言いませんよ」

そうは言っても顔には余裕がある。

「もうそんな話はですね」

「ですが」

しかし校長も負けてはいない。ここで楽しげな笑みを浮かべて言うのだった。

第二幕その三

「何か最近気になる娘がいるとか」

「うっ、それは」

それを言われると急に、であった。動きを止める牧師だった。

「まあそれは」

「ないとは言えないですね」

「それでもです」

だがここで牧師は遠い目になって述べた。

「どうもです」

「どうも?」

「昔のことを思い出してしまいます」

その遠い目での言葉であった。

「どうしても」

「あのテリンカさんですか」

「そうです。いい娘でした」

こう校長と管理人に対して話すのだった。

「あんないい娘はいなかったですね」

「まあまあ」

「そういうことは言わないで」

場がしんみりとなったので牧師を慰める校長と管理人だった。その彼に干し肉を勧める。言うまでもなくビールのつまみである。

「これでも食べて」

「ビールも飲んで」

「ええ、そうですね」

「今日は楽しくですよ」

「ですね。それは」

二人の言葉を受けて顔をあげた牧師だった。

「それでは」

「そうそう。楽しくですよ」

「飲みましょう」

「ええ。それじゃあ」

こうして三人はカードに酒、それとつまみに煙草を楽しんだ。そのうえで店を出てそうして夜の道を歩く。片隅には森がある。まず校長が見たのだった。

「あれ、あれは」

「あれは」

そして次には牧師が気付いたのだった。

「テリンカじゃないか」

「そうですね。あれがですか」

「ええ。よく似てますよ」

「何を言ってるのかしら」

実はそれはビストロウシカである。二人はあまりにも酔っていてそれで彼女を人間の女だと見間違えていたのである。相当な酔いであった。

「私が人間の筈がないじゃない」

「いや、本当に似ているな」

「何かこの人あの穴熊さんに似てるし」

ビストロウシカもビストロウシカで気付いた。

「っていうかそっくりじゃない」

「ふうむ。それはまた綺麗な」

校長も言う。ビストロウシカは彼にも気付いた。

「蚊にそっくりね、こっちの人は。それに」

「おや、あれは」

お互い気付いたのであった。同時に。

「あの人間は」

「あの狐か」

「あの人間なのね」

こうそれぞれ呟いた。

「逃げて今は森にいたのか」

「元氣みたいね」

ここで互いに因縁を感じたのであった。

「こんなところで会うとは思わなかったが」

「まあ今は捕まらないけれど」

「しかしあの娘は」

ここでその穴熊そっくりの牧師がまた呟いた。

「いい娘だった」

「まあそれはいい思い出しですな」

校長がその彼を慰めて声をかける。

「どうですか？今度は」

「今度は？」

「私の家に来ませんか？」

その慰めの為にまた声をかけた。

「私の家に」

「校長先生のですか」

「それで飲みなおしましょう」

その為だというのだ。

第二幕その四

「まだ夜は長いですし」

「そうですね。それでは」

「ではそれでいいですね」

「すみません、どうも」

「いえいえ、礼には及びません」

それはいいというのである。

「ですからそれで」

「わかりました」

こんなやり取りをしたうえで校長の家に向かうことになった。そして校長は残った一人である管理人に対しても声をかけるのであった。

「そうだ、貴方も」

「わしもですか」

「はい。どうですか？」

穏やかな声をかけるのだった。

「それで」

「そうですね。わしはですね」

「ええ、一杯」

「そうですね。それでは御一緒させてもらって」

「はい。それでは」

こうして三人でまた飲むことになった。ビストロウシカはそれを見てからまた一人咳くのだった。

「何か楽しそうね、人間も」

ここで人間のことを思うのだった。

「あれはあれで」

こう呟いてからそのうえで森に入る。するとだった。

ここで見事な赤い毛並みをした容姿のいい雄狐が出て来た。顔立

ちも見事だ。

「あれっ、あんないい狐いたのかしら」

「おや、これは」

「ここでその雄狐も言うのだった。」

「こんな美人がこの森にいたなんて」

「今まで気付かなかったわ」

「貴女の名前は？」

彼の方から尋ねてきたのだった。

「何と仰るのですか？」

「私の名前が？」

「ええ、一体何と」

「この森にいて私の名前を知らないのね」

少し不敵に笑っての言葉だ。

「またそれは」

「この森の南の方にいたからね」

だからだというのである。

「貴方は何処にいたのかな、この森の」

「私は大体東の方よ」

そこだと答えるビストロウシカだった。

「だから南には殆ど行かなかったから」

「だったら知らないのも無理はないね。僕は南からここに来たのは
はじめてだったし」

「ここに来るのはなのね」

「そうよ。それでなんだよ」

穏やかに笑って答える彼だった。

「ここに出て来たのは」

「そうだったの」

「それで君の名前は？」

「ここでまたビストロウシカの名前を尋ねたのだった。」

「何ていうのかな」

「私はビストロウシカっていうのよ」
名前をそのまま名乗った彼女だった。
「そう呼んでくれていいわ」
「そうか。ビストロウシカっていうのか」
「そのあんたは？」
今度は彼女から尋ねたのだった。
「あんたの名前は何ていうの？」
「ズトラシュビーテクっていうんだ」
彼は明るく名乗った。
「これが僕の名前さ」
「そう、ズトラシュビーテクね」
その名前を覚えた彼だった。
「覚えてたわ、その名前」
「うん、覚えておいて」
「そうするわ」
「そして」
さらに言う彼だった。ビストロウシカもそれを聞く。
「もう一つ言いたいことがあるけれど」
「何かしら、それは」
「結婚してくれないか」
こう彼女に言うのだった。

第二幕その五

「僕と」

「あらっ、いきなりなのね」

それを聞いて軽い言葉で返したビストロウシカだった。

「またそれって」

「駄目かな」

「そうね。あんたは見たところ」

「僕は？」

「顔もいいし」

まずはそのことについて言ってみせたのだった。

「スタイルもいいし」

「褒めてくれて有り難う」

「それに毛並みだって」

そのことも褒めるのだった。

「それに紳士だし。いいと思うわ」

「それならいいのかな」

「そうね。ただね」

「ただ？」

「結婚の時はよ」

くすりと笑って彼に告げるのだった。

「わかってるわよね、それは」

「それなら少し待ってて」

彼女が言いたいことをすぐに察して返したズトラシユビーテクだった。

「それはね」

「そう。じゃあ少し待ってるわね」

「君は何が好きかな」

行く前にこのことを尋ねるのも忘れなかった。

「それで」

「果物が好きよ」

それだと答えるビストロウシカだった。

「果物がね」

「そう、果物なんだ」

「果物なら何でもいいわ」

明るく笑って話す彼だった。

「何でもね」

「わかったよ、それじゃあ」

こうして一旦森の奥に消えた彼だった。そうして持って来たのは野苺だった。それをまとめて彼女の前に持って来たのである。口に啜えてそのうえで持って来たのであった。

「これでどうかな」

「あつ、いいもの持って来てくれたのね」

ビストロウシカはその野苺を見て笑顔になった。

「それじゃあそれでいいわ」

「うん、じゃあね」

「ええ、これで」

「ちよつとちよつとビストロウシカさん」

「それ母や過ぎないかしら」

今の彼女を見て周りから声がした。

「会ってすぐなんて」

「どうなのかしら」

「何よ、一体」

周りにいる梟やリス達に言われて顔をあげる彼女だった。

「何が言いたいのよ」

「何かじゃなくてよ」

「会ってはじめじゃない」

「だからそういうのじゃなくて」

その彼等に抗議するのだった。

「わからないの？運命の出会いよ」
「うっん、そう来たか」
「運命ってやつね」
「そうよ。感じたのよ」
「そうだというのである。」
「言っておくけれどね、私は」
「あんたは？」
「どうだっていうの？」
「今まで誰とも付き合ったことなかったわよ」
「あれっ、そうだったんだ」
「初耳だけれど」
「いや、確かそうだったよ」
トカゲがそれを保障してきた。
「ビストロウシカはあれで結構ね」
「身持ちが固かったの」
「嘘みたい」
「相手は選ぶのよ」
「そうだというのである。」

第二幕その六

「だからよ。けれど彼はね」

「確かに男前よね」

「惚れ惚れする位にね」

「実際にさ」

今度は鼠が出て来て言う。

「この人南の方じゃ凄い男前で通ってるんだよ」

「へえ、そうだったの」

「確かにいい顔と毛並みだけれど」

「スタイルもね」

容姿は折り紙付きである。これは誰もが認めるところだった。

「いい感じだしね」

「それじゃあ」

「けれどね。幾ら何でも会ってすぐは」

「どうかしら」

このことをまた言い合う森の住人達だった。

「ねえ。それでも」

「すぐってというのは」

「だから運命よ」

あくまでそうだと主張するビストロウシカだった。

「これは運命なのよ」

「運命ね」

「じゃああんたやっぱり」

「結婚するわ」

ここで彼女も宣言したのだった。

「もう決めたわ」

「本当だね」

ズトラシュビーテクはそれを聞いて笑顔になった。

「それでいいんだね」

「ええ、決めたわ」

また言う彼女だった。

「本当にね」

「よし、それじゃあ」

「ええ、二人で」

「式を挙げよう」

笑って話す彼等だった。

「それで一緒に」

「なりましょう」

「おやおや、本当に結婚するんだ」

「これはまた」

「まあいいか」

驚き呆れるところもあつたがそれでも受け入れることにした彼等
だった。

「じゃあ早速」

「結婚式だな」

「それでいいかな」

「起きていてよかったよ」

「全く」

わざわざ起きてきてこんなことを言う彼等もいた。

「じゃあ早速」

「いいかな、二人共」

「それで」

こうして皆出て来て彼等を囲む。そうしてだった。

「さあ、それじゃあ」

「式をね」

「歌って踊って」

「楽しく過ごして」

「御馳走も食べて」

それぞれ言ってきた。それぞれ食べ物も持って来た。

きつつき達も出て来てだ。森の皆に話す。

「さあ皆さん、祝い事ですよ」

「何とあのビストロウシカが結婚ですよ」

「あのは余計よ」

こうは言っても顔は笑っている。そのうえで自分の上の木にいる彼等を見るのだった。

「あの、はね」

「けれど祝うから」

「それはいいよね」

「有り難う」

そのことには素直に礼を述べるのだった。

「それはね」

「じゃあそれで」

「皆で」

今度は熊も出て来たのだった。

「さあ踊ろつよ」

「皆でね」

「楽しく」

「おめでとう、ビストロウシカ」

兎達が二人を囲んで踊りはじめる。

「おめでとうストラシユビーテク」

「これからも仲良くね」

「末永くね」

こう告げて二人を祝うのだった。ビストロウシカ達は今幸せの中に包まれていた。

第三幕その一

第三幕 輪廻

ビストロウシカとビストシュビーテクが結婚した夏は過ぎ秋になった。ここで森の中に一人のあまり品のいい感じのしない人間の男がやって来た。

野兎の一人が彼を見てだ。驚きの声をあげたのだった。

「げっ、あいつは」

「どうしたんだい？」

「まずいのが来たよ」

こつ仲間の一匹に声をかけるのだった。そして木の後ろに隠れる。仲間も野生の本能で彼と同じ動きをする。そのうえでまた尋ねるのだった。

「あいつは何かあるの？」

「ハラシタっていうんだよ」

背中に籠を背負っている彼を見ながらその名前を教えるのだった。

「あいつはね」

「ハラシタ？」

「行商人なんだよ」

「じゃあ問題ないんじゃないの？」

「けれどさ、密漁もするんだよ」

顔を顰めさせての今の言葉だった。

「密漁もね」

「えっ、そんなこともするのかい」

「そうなんだよ。それで僕達を狙うんだよ」

「見れば銃持ってるね」

ここで彼も気付いた。確かにそのハラシタという男は銃を手にしている。それを今にも撃とうとしているのも見えたのだった。

「じゃあやっぱり」

「ほら、皆隠れただろ」
「うん」

見ればその通りだった。森にいる皆が隠れている。動物達も鳥達も。蛇や虫達でさえそうだ。そうして隠れているのである。

「そういう奴だからね」

「隠れないと駄目か」

「そういうこと。人間も色々だからね」

こう話してだった。今は隠れるのだった。そのハラシタは動物達が見つからないのでそれで苛立たしさを感じていた。そのうえで周囲を見回しながら歩いていった。

「何でいないんだよ」

「当たり前だよ」

「見つかったたまるものですか」

こう言つて隠れたまま出て来ない動物達だった。ハラシタが困っているのであった。その彼の前に管理人が出て来て声をかけるのだつた。

「何をやってるんだい？」

「いえね、旦那」

ここで笑つて誤魔化した彼だった。

「ちよつと森の中を散歩してまして」

「銃を持つてかい」

「森には狼や熊がいますからね」

「よく言うよ」

「それで何をするかわかつてるさ」

その狼や熊も隠れている。そのうえでこっそり言うのだった。

「どれだけ面の皮が厚いんだか」

「だから密漁なんてやるんだらうけれど」

「それでなんですよ」

「密猟なんかするんじゃないよ」

「ははは、それはないですよ」

全てがわかつている管理人にも平然と返す。

「それはね」

「だったらいいんだがな」

「それで旦那」

あらためて彼に返すハラシタだった。

「悪い奴はいませんよね」

「目の前にいる奴以外はな」

彼もまたこう返したのだった。

「それ以外にはな」

「おや、じゃあいませんね」

「あんたはそうじゃないっていうんだな」

「誤解ですよ、誤解」

あくまでこう言う彼だった。

「それはね」

「そうなんだな」

「ええ。それでなんですが」

「何だ？ 一体」

「ここで何をしてるんですか？」

このことを彼に尋ねるのだった。

「一体何を」

「何をもわしは何だ？」

「森の管理人です」

これはもう言うまでもなかった。誰も知っていることである。

「それですけれど」

「じゃあわかるな」

「巡回ですか」

「そうだ。これも立派な仕事だ」

きつい目で彼を見据えながらの言葉だった。

第三幕その二

「何しろ不逞の輩がいつも森の中でうろつろしているからな」

「大変ですなあ、それは」

「全くだよ。それでだ」

「はい、それで」

「あなたは散歩をしているんだな」

「わかっていて尋ねるのだった。」

「そうなんだな」

「はい、そうです」

「ふてぶてしさは変わらない。」

「それが何か」

「そうか、わかった」

「一応その言葉は聞くのだった。」

「わかったがな」

「それでどうかしたんですか？」

「悪いことは言わないから早く森を出るんだ」

「あからさまな忠告であった。」

「いいな、すぐにだ」

「またそんなことを」

「疑われてもいいことはないよ」

「疑われるようなことはしていませんよ」

「お互いわかってこう言い合うのであった。」

「別にね」

「だといいんだがな」

「ええ。それで、ですけどね」

「それで？」

「何か聞いたんですけれど」

「管理人に尋ねる顔になっての今の言葉であった。」

「牧師さんですけれど」
「あの人がどうしたんだ？」
「結婚されるらしいですね」
「このことを尋ねるのだった。」
「何か」
「結婚まではいってないよ」
「それは否定する彼だった。」
「ただ」
「ただ？」
「いい人は見つけたよ」
「それは事実だというのである。」
「いい人はね」
「そうですね。それは何よりですね」
「あんたも早くいい相手を見つかるんだね」
笑って彼に告げる管理人だった。
「もういい歳なんだし」
「ははは、それですけどね」
「そう言われると明るく笑って返した彼だった。」
「私もですね」
「まさか結婚するのかい」
「はい、今度します」
その笑顔で告げたのだった。
「私もめでたく」
「それは初耳なんだが」
「初耳でも結婚しますから」
「それは事実だというのである。」
「いい娘を見つけてまして」
「そうだったのか」
「相手の娘を知りたいですか？」
「相当嬉しいらしく自分から言ってきたのだった。」

「その相手は」

「そうだな。誰なんだい？」

「テリンカっていうんですよ」

その娘だというのだ。

「その娘はね」

「テリンカっていうと」

その名前を聞いてふと思い出した管理人だった。

「確か」

「牧師さんが前付き合ってた娘ですよ」

「ああ、そうだったな」

以前彼と飲んでその名前が出たことを思い出したのである。

「その娘だったか」

「いい娘ですよ」

満面に笑みを浮かべて話す彼だった。

第三幕その三

「もうね。可愛くて気は優しくて」

「そんないい娘がよくだよ」

「よく?」

「御前さんみたいなのと一緒にになったものだよ」
「彼が今言うのはこのことだった。」

「全くね」

「それが人徳ってやつですよ」

「違うと思うがね」

管理人はハラシタ本人にはっきりと告げた。

「それはね」

「違うっていうんですか」

「御前さんみたいな人にはだよ」

「あたしみたいなのは?」

「あんな可愛い娘は勿体無いよ」

「こう言うのである。」

「全くね」

「そんなことを言うんですか」

「言っさ。とにかくだね」

「そう返す彼だった。」

「まああれかな」

「あれとは?」

「結婚自体はよかったよ」

そのことは素直に祝う管理人だった。

「それ自体はね」

「どうも有り難うございます」

「幸せになるんだよ」

微笑んでハラシタに告げた。

「いいね、それで」

「それでプレゼントを考えてるんですけどね」

「プレゼントか」

「はい、何がいいでしょうか」

「そうだな。寒いからな」

彼から相談を受けて少しばかり首を捻って。それで言うのだった。

「襟巻きなんかがいいな」

「襟巻きですか」

「それなんかどうだい？」

また彼に告げるのだった。

「襟巻きなんかな」

「わかりました。それじゃあそれでも」

管理人のその言葉に対して頷くハラシタだった。

「プレゼントします」

「そうか。それならそれでいいんじゃないかな」

「じゃあそれで」

二人はこんな話をしてから別れた。ハラシタはそれから森の奥に入った。そうして切り株の上に腰掛けて休んでいるとであった。

狐の一家がやって来た。ビストロウシカ達である。

「おや、あれは」

「あつ、嫌な奴ね」

ハラシタを見て隣にいる夫のストラシユビーテクに対して告げるビストロウシカだった。その後ろには子狐達が可愛い姿を見せている。

「あれは」

「嫌な奴って？」

「あの人間はハラシタっていうのよ」

嫌悪感に満ちた顔で夫にまた告げるのだった。

「密猟していてね。私達を狙っているのよ」

「そんな奴等なんですか」

「そうなのよ。とてもね」
「そうだというのである。」

「まずいわよ、こいつは」

「じゃあ逃げようか」

「ええ。まずはね」

「ここでさらに夫に話す。」

「この子達を早くね」

「逃がすっていうんだね」

「そうよ、まずはね」

「わかった。それじゃあ」

夫は妻のその言葉に頷いてだった。彼等を逃がすと妻にあらためて告げた。

「じゃあ僕達も」

「待って」

しかしであった。ここでさらに夫に告げるのだった。

第三幕その四

「子供達は逃がしたけれど」

「まだ何かするのかい？」

「こいつは一度酷い目に逢わせてやりたいわ」

こづ言うのである。

「ちよっとね」

「酷い目にね」

「いつも森に入って皆を撃って」

そのことを同じもりの住人として怒っているのである。

「そんな奴だから」

「だからなのかい」

「そうよ。今はね」

また言う彼女だった。真剣な顔で夫に言う。

「それは」

「まずはよ」

さつとハラシタのところへ近付いてだ。その膝に軽く噛み付いてみせた。

「あっ、こいつ」

「ほら、そうしてよ」

こづしてであった。彼を挑発する。怒ったところで立ったところ
でさらに言うのだった。

「後は逃げるのよ」

「それで何処までなんだい？」

「坂の上だね」

そこにだというのだ。

「行きましよう。いいわね」

「わかったよ。それじゃあ」

「わかったよ」

そうしてであった。彼等はすぐにその坂の上に向かう。ハラシタはまんまとそれに乗って二匹を追う。

「待てこの野郎」

怒った顔で二匹に向かつて駆ける。

「こつなつたらもう許さないからな」

「ほら、乗ってきたでしょ」

「うん」

二匹は並んで駆けている。ズトラシユビーチクはその横の妻の言葉に頷く。その間鳶や小石といったものを何なくかわしながらだつた。

「それで坂の上までね」

「行つてそれで」

「そこに鳶が絡まつてるから」

そのことを話すのだった。

「そこに連れて行つたらね」

「鳶に足が絡まつて」

「それでこけるから」

そこまで読んでいるビストロウシカだった。

「それでやつつけてやるわ」

「よし、それじゃあ」

「待て、この糞狐共」

晴らしたはまだ二匹を追っている。

「逃がさんぞ、懲らしめてやる」

「捕まるものですか」

駆けながら後ろをちらりと見ての言葉である。

「人間なんかにな」

「銃を持っているからそれに注意しないと」

「注意していればいいのよ」

「それだけでいいんだ」

「そうよ。当たらなければいいから」

実に素っ気無く言うのだった。

「それだけでね」

「また随分と強気だね」

「だってわかってるから」

だからだというのだった。

「あの人間の腕前もね」

「実際のところ腕前はどうなんだい？」

「これが下手なのよ」

後ろのその人間を馬鹿にしての笑みだった。

「もうね。当たる奴なんてね」

「いないんだ」

「実はそっちはからっきしなのよ」

そうだというのである。

第三幕その五

「けれどね。万が一ということがあるから」

「だから用心して」

「そういうこと。いいわね」

「ええ、じゃあ」

こうしてであった。その蔦の上まで来てそれで飛び跳ねる。ハラシタはそれに気付かず蔦に足を取られてしまった。そうして見事にこけてしまったのだった。

「くっ、しまった」

「あはは、見事に引っ掛かったわね」

「そうだね」

その彼を見て笑う彼等だった。

「これでいいのよ。いい気味だわ」

「それじゃあ子供達のところに帰ろうか」

「そうしましょう」

上機嫌で話して子供達のところに向かう彼だった。そうして一人残ったハラシタは慄然とした顔で起き上がってそれで家に帰った。

そしてまた酒場では。校長達が飲んでいた。相変わらず黒ビールをソーセイジで飲みそうして煙草とカードも一緒にしていた。

青と白の煙がくゆらぐ中で。酒場のおかみが三人のところに来た。

「ねえ校長先生」

「何ですかね？」

気取った動作で彼女に応える校長だった。

「森に狐の一家がいますよね」

「そりゃそういうのもいるでしょう」

それを聞いても気取ったまま返すのだった。

「狐も」

「その母親狐と父親狐がですね」

「はい」

「森の奥の方に入ったらしくて」

「森の奥にですか」

「子供達はそのままそれぞれ独立したらしいですよ
そう言ったというのである。」

「それで今は娘狐の一匹が森の東にいるそうです」
「成程」

「それがまた母親に負けず劣らず悪い奴らしくて」
そしてこんなことも言うのだった。

「何かつていうと人をからかうそうです」

「母親そっくりなんですね」

「そうなんですよ」

まさにその通りだというのである。

「とんでもない奴ですよ」

「ええ、確かに」

言葉は返すがその注意はカードにいつている。ずっと牧師、管理人と三人で遊んでいる。その口にはパイプが貼り付いている。

「それは」

「全く以つてですよ」

そんな話をしたらすぐに他の客のところに向かうおかみだった。

彼女がいなくなると牧師がここで溜息をつきながら言うのであった。

「何ですかね」

「どうかしたのですか？」

「いえ、私も結婚できそうです」

そのことは素直に喜ぶ彼だった。

「ただ」

「ただ？」

「何ですかね」

こう言つてばやくのだった。

「ほら、ハラシタさんが結婚しますよね」

「ええ、そうですね」

「そのことで」

「ぼやく言葉をさらに出していく。」

「思うんですけれど」

「何をですか？」

「いや、テリンカがね」

「彼女のことだというのだ。」

「あの娘のことがどうしても気になって」

「もう終わって別の彼女と一緒にになってるのにかい？」

「それでもですよ。どうも」

「またぼやきの言葉を出す。」

「あれが私だったらなって思ったりもしまして」

「それも人生さ」

「ここで管理人がビールを一杯飲んでから述べた。」

「それぞれ別の相手と結婚するのよね」

「それもなんですか」

「そうだよ。だから思うこともないさ」

「そっだというのである。」

第三幕その六

「別にね」

「そんなものですか」

「そんなものだよ。それじゃあ」

「はい」

「飲もう」

こう言ってそのビールを勧めるのだった。

「もう一杯ね」

「わかりました」

「さあ、じゃあ」

牧師だけでなく校長もそれに応える。そうして飲んでいく。

それだけでなかった。ここでまたおかみが来てだった。言うのだった。

「あのですね」

「はい、ビールですね」

「どうも」

「いえいえ、ビールだけじゃないんですよ」

その新しいビールと茹でたソーセージを出しながら話してきたのだった。

「面白い話がありました」

「面白い話？」

「ほら、ハラシタさんが結婚しますよね」

彼女もこのことを話すのだった。

「その御相手ですけれど」

「テリンカか」

牧師がまた難しい顔になった。

「そのテリンカが一体」

「ハラシタさんはその贈り物にあるものをあげました」

「贈り物？」

「そうなんですよ。襟巻きをですね」

管理人はそれを聞いて一人納得した顔になった。そうしてそのうえで森の中で彼と話をしたことを思い出したのであった。そうなのだ。

「成程ね」

「その襟巻きですけれどね」

おかみはさらに話す。

「羊のね」

「羊のかい」

「結局それにしたそうですよ」

「いいんじゃないかな、それで」

管理人はそれを聞いて納得した顔になった。

「羊は何度でも刈って取れるしおまけに柔らかくて温かくてね」

「ええ。狐やクロテンも考えたそうですけれどね」

ここで狐の話も出た。

「結局のところは」

「それでなんだね」

「ええ。それで羊です」

そうなのだった。

「けれど私もですよ」

「おかみさんも？」

「新しい襟巻き欲しいですね」

笑いながら言った言葉である。

「この首にね」

「ははは、そんなのは必要ないじゃないか」

校長はこんなことを言った彼女に笑って返した。

「別にね」

「必要ないっていうんですか」

「そうだよ。そんなに太い首をしていて」
その丸々と太った彼女を見ての言葉である。
「そうじゃないかい？寒くないだろ」
「寒いですよ」
「そうだというのである。」
「私だって」
「寒いのかかい」
「寒いですよ」
「また言う彼女だった。」
「しつかりとね」
「そうなのか」
「うちの宿六ときたら」
その亭主のことである。
「もうそんなもの一つも贈らないんですよ」
「ははは、そうだろうな」
管理人はおかみのふてくされた言葉を聞いて笑った。

第三幕その七

「それはね」

「それはなんですか」

「お互い長い付き合いになるとそんなものは贈らなくなるわ」
「そうだとするのである。」

「全くね」

「全くって」

「わしだって昔は」

そして自分のことも言う彼だった。

「随分と贈り物をしたよ」

「奥さんにですね」

「そうさ。けれど今はもうしなくなつたよ」

ここで無意識のうちに寂しい微笑を浮かべてしまった。

「もうね」

「そうなんですか。何か私には」

管理人の話をここまで聞いて応える牧師だった。

「わからない話ですね」

「結婚して随分経てばわかるよ」

これが管理人の牧師への返答だった。楽しい中にも寂しいものがあつた。

それから随分と経ってからのことだ。管理人はこの日も森の中に入っていた。そうしてそのうえで切り株の上に腰掛けてそれで休んでいた。

「何かあの人もね」

「そうだね」

「歳を取つたね」

森の動物達はその彼を見ながらひそひそと話す。

「随分とね」

「僕達もそうだけれど」

「死んだ人もいるしね」

「確かにね」

そんな話をしながら彼を見ている。その彼が言うのだった。 38

「歳を取るとなあ」

首を捻りながらの言葉であった。

「何か愛情とかそういうものがなくなっていくものかな」

「寂しいこと言うなあ」

「全く」

動物達も鳥達も虫達もその言葉を聞いてしんみりとなる。

「確かに歳を取ったけれどね」

「それでもね」

「枯れてしまったな。若い時はそれなりに愛していたのに」

「奥さんのことだね」

皆それを聞いてすぐに察した。

「そのことなんだ」

「まあ長い間一緒にいると結構慣れるからね」

「ほら、ビストロウシカおばさんも」

ここで彼女の名前も出て来た。

「何か最近一緒にいるのが当たり前になってきたって言うてるし」

「ズトラシユビーチクさんと？」

「子供さん達が遊びに来てても何かそれも慣れたもので」

「枯れてるんだ」

「そんなことを言ってたよ」

そんな話になっていた。

「どうもね」

「あの人も若い時は凄い美人だったのにね」

「今も美人じゃないか」

「いや、かなり老けたよ」

そうなっているというのである。

「若い時に比べたらね」

「そうなんだ」

「そうだよ。もうすぐお婆さんだしね」

「それでなんだ」

「誰だつて歳を取るよ」

「こんな言葉も出された。」

「そして死んでいくからね」

「そんなものなんだ」

そんな話をしているとであった。管理人はうとうととしだした。

しかしその彼のところに見事な毛並みと整った顔立ちの雌狐が出て来て。側に落ちていた野苺の落ちているものをさっと取って走り去ってしまったのであった。

「あの狐は」

その雌狐を見て言う彼だった。

「あの狐に似ているな。娘かな」

「そうだよ」

そしてここで。誰かの声を聞いた。

「そうだよ。あの人はビストロウシカさんの娘さんだよ」

「！？まさか」

「心に話し掛けてるから」

だからわかるというのだった。相手は。

「お爺さんの心にね」

「わしもお爺さんか」

管理人は今の言葉についつい笑ったのだった。

「もうな」

「そうだよ。お爺さんだよ」

そうだというのだ。言いながら彼の足元に一匹の青い蛙が来た。

そのうえで彼に対して言ってきたのである。

「お爺さんじゃない、もう」

「そうじゃな。わしもそんな歳じゃな」

言われて笑顔で受け入れるのだった。

「もうな」

「それでお爺さん」

蛙はさらに彼に言ってきた。

「僕にもお爺さんがいたんだよ」

「御前さんにもか」

「そうだよ。お爺さんが言ってたんだ」

管理人をその黒い二つの目で見上げながら心に語り掛け続けている。

「昔ここであんたの鼻の上に落ちたつてね」

「ああ、あの時か」

言われてその時のことを思い出したのだった。

「あの時のことか」

「思い出してくれたかな」

「うん、思い出したよ」

管理人はまさにその通りだと応える。

「あの時の蛙が御前さんのか」

「お爺さんだよ。お爺さんはね」

「うん、それで」

「いつも言っていたよ」

こう彼に話すのだった。

「お爺さんの鼻の上に落ちたその時をね」

「そうか。その時をか」

話を聞いてそこに深い巡り合わせと時の移ろいを感じるのだった。その彼がその中で見たものは蛙の言葉だけではなかった。また戻って来てあの時と同じ様に蛙にちよっかいをかけて彼を自分の鼻の上によつてくれた狐もだった。森の中のその不思議な輪廻を見たのであった。

利口な女狐の話

完

2009・12・9

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6483n/>

利口な女狐の話

2011年4月28日00時58分発行